

シャムの英雄山田長政 タイ

タイは公私にわたり何度か訪れた。首都バンコクは行くたびに街が膨張し、大きなビルが建ちならび、国際都市の風格が増しているように感じる。経済が順調に推移しているのだろう。

最初に訪れた1978年のタイの印象は、南国らしくカラフルで何ごともゆったりしていて美しかった。特にバンコクは王宮を中心とした色彩に満ち溢れた寺院が多く目を見張ったものだ。



バンコクのカラフルな寺院

高校時代日本史の授業で山田長政の話聞いた。家康の時代に海外へ雄飛した日本人がいたことは意外でもあり羨ましくもあったが、敗戦国となった日本では外貨が不足して、一般には海外渡航ができない時代であった。本や映画からしか知る由の無い外国の文化を自分の目で確かめ接してみたいという衝動を強く感じたものである。時を経て日本人が自由に海外へ出かけられるようになったのは1964年であった。

始めてバンコクに降り立った時、日本史で学んだ時の胸の高鳴りの影響であろうか、真っ先に頭に浮かんだのは日本人町の遺跡のことだった。出張の合間を縫って車でアユタヤに向かった。

アユタヤはバンコクに比すと田舎町で思いの外ひっそりとしていた。ここが日本人町の跡と案内されたところは、チャオプラヤ川のゆったりした流れの際のなんの変哲もない野原の片隅に、木造であろう

か杭のような物に「日本人町の跡」と記してあるだけで、家の土台はおろか何も無い殺風景なところで戸惑った。



アユタヤの日本人町の碑



山田長政と日本人町の碑文



ところがそれから13年たった1991年に再訪した時には、石の立派な石碑に「日本人町跡」と日本語で記してあり石灯籠さえ飾ってあった。その後行った時には、石板が建っていて日本語・英語タイ語で「日本人町跡と山田長政」と説明文が記してあり、この一角はきれいに整備された小公園の趣である。日本経済の成長と共に恥ずかしくない体裁を整えたのだろう、これも時代の流れであろうか。

江戸幕府は1603年徳川家康が天下を取って江戸を首都と定めてから始まる。江戸時代初期1620年ごろから外国との商取引が盛んとなり海外へ雄飛する日本人が多くなったが、中には密航者も多く山田長政もそういう一人だった。

彼はシャム（現在のタイ）を中心に活動し、シャムの首都アユタヤで権勢を揮いリーゴル国の王になった。山田長政（別名＝仁左衛門）は1590年駿河の国（現静岡県）に生まれ、沼津藩主に使えたが最下層の武士である駕籠かきを経て、朱印船で長崎・台湾を經由してシャムへ渡り近隣諸国を舞台に交易をおこないながら活動し1630年に没した。



悠久を思わせるチャオプラヤ川



アユタヤの寺院の遺跡

アユタヤはシャム（現タイ）の首都であり世界各国から人々がやってきた。アユタヤはバンコク市内を貫き流れるチャオプラヤ川の上流の中州に位置する都で、アユタヤ王朝の時代に「日本人町」ができた。近くにはオランダ商館、ポルトガル人街があった。各国はリーダーを中心に自治制をとった。日本人町は駿河から密航でやってきた山田長政が、自身の持ち船で近隣と交易し頭角を現し遂には日本人の頭となりこれを治めた。そして日本の中央政府である幕府と緊密な連絡を取り合いシャム政府との交流を深める努力をしている。

当時アユタヤの日本人は1500名前後がいたといわれている、この中には日本を追われたキリシタン信者が400名ほどいたと伝えられている。さらにシャムのソントム国王の近衛兵として山田長政率いる日本人800名が仕えていたともいわれ、スペインのシャムへの侵攻を2度にわたり退けシャム王の信任が厚かったが王が急死し、王位相続の争いが起こり山田長政の推した若干15歳の新王を盛り立て、反対派を撃破した。しかし反対派は山田長政に恨みを抱き遂には毒殺する。

日本の幕府は日和見主義をとり、アユタヤの日本人町は焼き討ちに遭い、住民である日本人は隣国カンボジアへ逃れ、一部は日本へ逃げかえった。しかし新王は日本人に今までの特権を与えるなどしたので、日本人町は再建され17世紀末あたりまで存在した。

シャムはその後日本との交易に熱心であったが、オランダは交易戦略で両国間を遮断し交易を妨げた。日本は鎖国状態に入りオランダのみが日本との交易を許された唯一の国となったのである。